

# 第14回

大会記録集

# 山形県社会教育研究大会

研究主題

「地域を創り 未来を拓く社会教育のあり方」  
つなぐいのち 学び 地域



期日 令和5年11月16日(木)

会場 荘銀タクト鶴岡・鶴岡市役所・鶴岡アートフォーラム

山形県社会教育連絡協議会



# 大会のひとコマ



開 会 行 事



開会行事・開会の言葉  
富士 直志 大会副実行委員長



主催者挨拶  
安藤 耕己 大会会長  
成田 勇 大会実行委員長（代理）



来賓祝辞  
高橋 広樹 山形県教育委員会教育長  
佐藤 寿尚 山形県教育局庄内教育事務所長（代理）



来賓祝辞  
皆川 治 鶴岡市長  
阿部 真一 鶴岡市副市長（代理）



次年度開催地区代表挨拶(村山地区)  
犬飼 藤男 大会副会長



開会行事・閉会の言葉  
前田 聡子 大会副実行委員長



来賓の皆様



司会者  
松浦 彩 フリーアナウンサー



山形県社会教育連絡協議会  
山形県優良公民館等表彰 山形県社会教育委員・社会教育関係職員表彰



添川・東堀越 子ども獅子踊り(鶴岡市立東栄小学校)



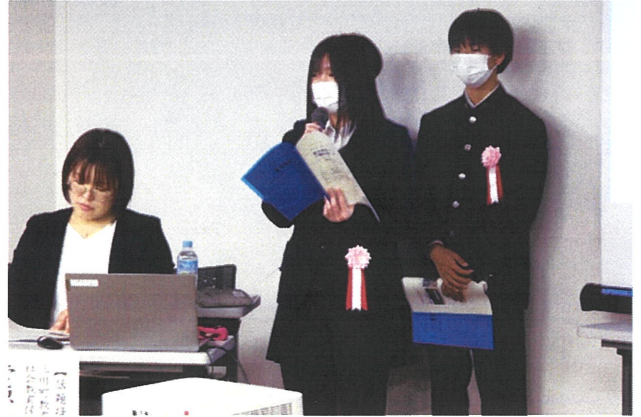
第1分科会「現代的課題等への対応」



第2分科会「学習機会・学習環境の充実」

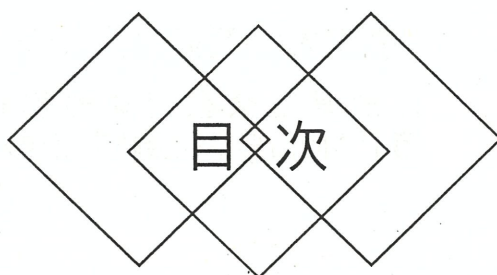


第3分科会 「関係機関等との連携・協働」



第4分科会 「次世代の人材育成」





1	大会副会長・実行委員長あいさつ	2
2	大会プログラム	3
3	分科会記録	
(1)	第1分科会「現代的課題等への対応」	5
(2)	第2分科会「学習機会・学習環境の充実」	12
(3)	第3分科会「関係機関等との連携・協働」	17
(4)	第4分科会「次世代の人材育成」	23
4	参加者内訳	30
5	令和5年度山形県社会教育連絡協議会表彰	31
6	参加者アンケート結果	32

# 大会副会長・実行委員長あいさつ

## — 今次大会を終えて —

山形県社会教育連絡協議会 副会長  
第14回山形県社会教育研究大会 実行委員長

成田 勇



「第14回山形県社会教育研究大会」庄内大会は、多くの関係者のご協力によって、無事終了することができました。関係者各位には心から御礼を申し上げます。今次研究大会は、酒井家庄内藩の所領であった田川郡と飽海郡の二市三町の社

会教育に関わるメンバーで実行委員会を組織し、庄内教育事務所を事務局として準備を  
してまいりました。大会参加者は総勢443名でした。大会を終えて、副会長・大会実  
行委員長として、提出された231名のアンケートに学びながら本大会を振り返ります。

大会の運営面では各分野の流れがスムーズであったという高い評価でした。実行委員  
の皆さんは日常的に社会教育・生涯学習の事業を企画し、運営してきたメンバーですか  
ら良かったと思います。また、伝統芸能発表では東栄小学校の5、6年生の獅子踊りに  
対する大きな拍手も印象的でした。発表後、帰路に就く児童を見送りましたが、「良かっ  
たヨ！」と声をかけると「ありがとうございます！」と大きな声ではつらつと応えて  
くれました。この清々しさは地域の大人と共に学んでいる日常から身に付いたものだろ  
うと感じました。分科会では、地域社会を再生させ、わが住むまちへの愛着と誇りを呼  
び戻す「ふるさとを愛する心と人材の育成」について、各市町村の取組みを学び交流し  
ました。そして、多くの参加者は自分が住む地域課題に対する事業力、企画力、実践力  
を学びたい、共有したいという熱い期待をアンケートに書いてくれました。各分科会の  
話題提供者及びアンケートに書かれている今日の社会教育・生涯学習の課題となるキー  
ワードを列挙します。空き家・移住者支援、地域産業振興、住民による地域環境保全、  
地域学校協働活動の推進、学校の統廃合と高校受験への学力向上、青少年のボランティ  
ア活動、地域の祭りづくりなどです。こうしたキーワードに関わる多種多様な事業は、  
地域づくり、つながりづくり、人づくりをテーマに企画され、実践されておりますが、  
この取組みに対する実践をより深く学びたいという期待が多くの参加者の声でした。庄  
内大会は成功裏に終了することができたと評価させていただきます。

来年度は村山地区を会場に大会が開催されます。県内各施設で取り組まれている事業  
を深く知りたい、学びたい、質問したいという参加者の期待がアンケートに滲んでおり  
ました。大会の企画、運営は大変ですが、参加者は山形県内の社会教育が一層充実・発  
展するための事業企画の交流を求めています。さらに充実した研究大会の継続に向け  
て、村山地区の大会関係者をお願いいたします。



第14回山形県社会教育研究大会

プログラム

大会受付【12:30~13:00】

I 開会行事【13:00~13:35】

- 1 開会の言葉  
大会副実行委員長 富士直志  
(山形県社会教育連絡協議会 理事)
- 2 表彰  
(1) 山形県優良公民館等表彰  
(2) 山形県社会教育委員・社会教育関係職員表彰
- 3 主催者挨拶  
大会会長 安藤耕己  
(山形県社会教育連絡協議会 会長)
- 4 来賓祝辞  
山形県教育委員会 教育長 高橋広樹  
鶴岡市長 皆川治
- 5 大会顧問・参与紹介
- 6 次年度開催地区代表挨拶(村山地区)  
犬飼藤男  
(山形県社会教育連絡協議会 副会長)
- 7 閉会の言葉  
大会副実行委員長 前田聡子  
(山形県社会教育連絡協議会 理事)

II 伝統芸能発表【13:35~14:10】

「添川・東堀越 子ども獅子踊り」(鶴岡市立東栄小学校)

休憩・移動 【14:10~14:30】

## Ⅲ 分科会【14:30～15:55】

分科会	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会
テーマ	現代的課題等への対応	学習機会・学習環境の充実	関係機関等との連携・協働	次世代の人材育成
視点	現代的な課題や地域課題の解決に向けてどう取り組むか。	地域住民にとって魅力的な学習プログラムの企画・運営や学習環境の充実をどう図るか。	地域住民・各種団体・学校・関係機関等との連携・協働をどう進めていくか。	社会の変化に対応する地域の人材を育成するために、社会教育事業をどう仕組むか。
会場	鶴岡アートフォーラム 交流広場「フォーラム」	荘銀タクト鶴岡 小ホール	荘銀タクト鶴岡 大ホール	鶴岡市役所 6階 大会議室
話題提供者	おぐにマルチワーク 事業協同組合 事務局長 吉田 悠斗 氏	ケイクスデザインオフィス 代表 大沼 兄昌 氏	最上町教育委員会 教育文化課生涯学習室 主事 結城 歩 氏	三川町教育委員会教育課 社会教育係 生涯学習推進員 菅原 知子 氏
	東根市「カクレトミヨ生息地」保存連絡協議会 事務局長 井上 正宏 氏	舟形町教育委員会教育課 社会教育係 主任 渡辺 伸雄 氏	温海中学校 地域学校協働本部 地域学校協働活動推進員 古舘 由隆 氏	南陽青年団 団長 小田 朝暉 氏
助言者	弘前大学 教育学部 准教授 越村 康英 氏	東北大学大学院 教育学研究科 准教授 松本 大 氏	一般社団法人 とちぎ市民協働研究会 代表理事 廣瀬 隆人 氏	福島大学 人間発達文化学類 特任教授 天野 和彦 氏
運営責任者	遊佐町教育委員会 教育課 課長 鳥海 広行	庄内町教育委員会 社会教育課 課長 樋渡 真樹	酒田市教育委員会 社会教育課 課長 前田 聡子	鶴岡市教育委員会 社会教育課 課長 沼沢 紀恵
司会者	山形県教育局 生涯教育・学習振興課 社会教育専門員 中里 秀樹	最上教育事務所 社会教育課 主任社会教育主事 八城 良美	村山教育事務所 社会教育課 主任社会教育主事 伊藤和賀子	置賜教育事務所 社会教育課 主任社会教育主事 阿部 文
記録者	村山教育事務所 社会教育課 社会教育主事 鈴木 玄輝	最上教育事務所 社会教育課 社会教育主事 高橋 裕美	村山教育事務所 社会教育課 社会教育主事 大泉 泰俊	置賜教育事務所 社会教育課 社会教育主事 秋山 憲司

## Ⅳ 閉会(分科会ごと)【16:00】

# 第1分科会

テーマ

## 現代的課題等への対応

会場：鶴岡アートフォーラム  
交流広場「フォーラム」

視点

現代的な課題や地域課題の解決に向けてどう取り組むか。



- 話題提供者** ○おぐにマルチワーク事業協同組合  
事務局長 吉田 悠斗 氏
- 東根市「カクレトミヨ生息地」保存連絡協議会  
事務局長 井上 正宏 氏
- 助言者** ○弘前大学 教育学部  
准教授 越村 康英 氏
- 運営責任者** ○遊佐町教育委員会教育課  
課長 鳥海 広行
- 司会者** ○山形県教育局生涯教育・学習振興課  
社会教育専門員 中里 秀樹
- 記録者** ○村山教育事務所社会教育課  
社会教育主事 鈴木 玄輝

## I 話題提供

小国町での特定地域づくり事業協同組合制度の取り組み  
おぐにマルチワーク事業協同組合 事務局長 吉田 悠斗 氏

### 1 はじめに

当組合は、総務省の特定地域づくり事業協同組合制度を活用した山形県第1号の事例として令和3年11月に事業を開始した。この制度は人口が急減している地域において、地域産業の担い手を確保するための人材派遣業などを行う事業協同組合に対して国と市町村が制度的・財政的な支援を行うものである。現在、山形県内外から移住した7名の職員を正社員として組合で雇用し、組合員となっている17の町内事業者のもとへ派遣している。

### 2 具体的な取り組み

- ① 小国町・組合 PR  
求人サイトやSNS、新聞などのメディアを通じた広報  
小国町・マルチワーク説明会（オンライン/現地）
- ② 職員（移住者）支援  
移住（住居、車、買い物、ゴミ捨てなど）  
暮らし（人や地域団体の紹介、冬季間の家の維持管理、車の運転方法など）  
キャリアアップ（月に一度の面談、起業支援団体の紹介など）

③ 組合員事業者への人材派遣

- 職員とのマッチング（派遣契約書作成、シフト調整、服装や持ち物の案内など）
- 職業訓練（マニュアル車運転講習、草刈り機操作講習、その他資格取得など）
- 課題解決（作業マニュアル作成、売り上げ向上など）

### 3 活動等の成果

事業を開始してから2年が経とうとしているが、10名の方がUターン、Iターンを含めて小国町に移住した。今年度は人材派遣業以外にも特定の飲食店の事業承継を想定した職員を募集する採用代行事業を始めたり、職員の1人に個人事業として一軒家をシェアハウスとして運営・管理してもらい、その運営支援や入居者の紹介を行ったりする事業も展開するようになった。小国町には空き家が数百軒もあるが、すぐに住める空き家はなくアパートなども不足している。空き家やアパートの空室が出たらすぐに引っ越せるような仮住まいとして移住者がシェアハウスを活用する例が増えてきたため、空き家対策のためにもシェアハウスの運営支援業務を行った。

### 4 今後の課題

これからも移住者を中心とした職員を増やしていきつつ、今雇用している職員が着実に起業、事業承継ができるようにサポートしていく必要がある。また、派遣先の一つに創業1706年の老舗日本酒酒蔵があるが、従業員の高齢化等様々な課題があることから、それらの課題を解決していけるような人材派遣、新たなプロジェクト推進をしていきたい。

#### 民学官連携によるカクレトミヨの保全活動

東根市「カクレトミヨ生息地」保存連絡協議会  
事務局長(東根市教育委員会生涯学習課長) 井上 正宏 氏

#### 1 はじめに

東根市大富地区の小見川には、「カクレトミヨ」と呼ばれる淡水魚が生息している。平成19年から20年にかけて個体数が激減し、絶滅が危惧されたことから、この希少種を末永く後世に残すため、平成21年5月に地域住民、大学等の研究機関及び行政機関で構成する「東根市「イバラトミヨ生息地」保存連絡協議会（令和5年4月1日から、現在の名称に変更）」を設立。以降、民学官が連携した保全活動を展開している。

#### 2 具体的な取り組み

(1) 草刈り・藻刈り

例年5月と9月の2回に分けて実施。カクレトミヨの営巣に影響が及ばないよう、川岸から約30cmの水草は刈らず、河川の中央部にある水草や藻を手作業で刈り取る。

(2) 個体数調査

例年11月、2日間にわたり実施。1日目にトラップを設置し、2日目に回収する。捕獲した個体数から河川に生息している推定個体数を計算により算出している。

(3) 刺し網、防鳥ネットの設置

例年12月に実施。カクレトミヨを捕食する可能性がある大型魚及び冬に飛来する鳥類への対策として、刺し網やネットを設置している。

### 3 活動等の成果

#### (1) 個体数の安定化

大学等、研究機関の専門的なアドバイスはもとより、昔からカクレトミヨを見守ってきた地域住民の知恵も加わり、献身的な保全活動を行った結果、カクレトミヨの生育環境が大きく改善した。

#### (2) 「イバラトミヨ特殊型」から「カクレトミヨ」に、そして「市の魚」の制定

令和3年9月、小見川に生息する個体が、地域固有の新種であることが研究機関より証明され「イバラトミヨ特殊型」から「カクレトミヨ」に命名された。また、令和4年7月7日に「市の魚」に制定された。

### 4 今後の課題

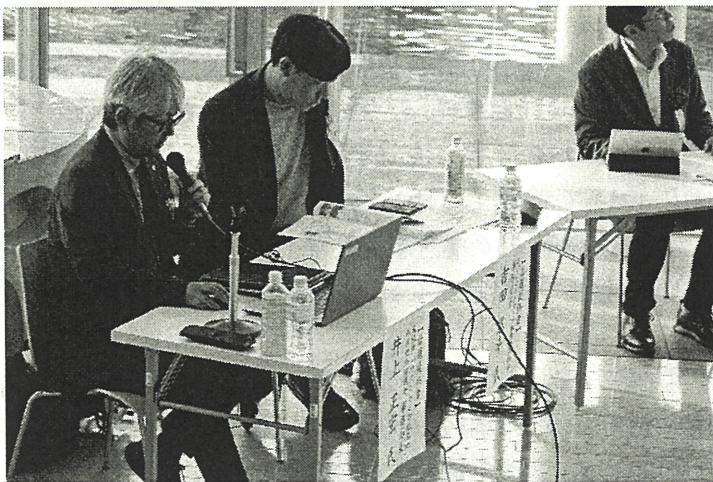
カクレトミヨが「市の魚」に制定されたことが契機となり、令和5年5月に実施した「草刈り・藻刈り」には、地元企業から4名、ボランティアとして参加してもらった。今後は、協議会の活動内容を積極的にPRし、広くボランティアを募集するなど、市全体でカクレトミヨを保全する機運の醸成に努める必要がある。

## II 質疑応答

### 【おぐにマルチワーク事業協同組合 吉田氏への質問】

Q：組合の構成の部分と、組合に参画いただく事業者を集める際にメリットなどをどのように伝えて集めていったのかについてお聞きしたい。(山形市)

A：17事業者の構成としては、その半分が個人農家及び農業法人となっている。農業関係者が半分となっているが、その他、小国町は製造業も盛んなので製造業の会社にも入っ



てもらっているし、温泉施設やスキー場を運営している第三セクターにも入ってもらっている。その他、日本酒酒蔵や地元の飲食店など多様な業種に渡っている。

事業者の募集については、小国町の移住・定住を推進する部署で、「小国町らしい暮らし方・働き方構築モデル」というものを3年かけて実施してくださった。1年目は、小国町内の400事業者以上を対象に「どれくらいの時期にどれくらい人が足りていないか」という

アンケート調査を実施した。その際、最低でも10名は出資をしてくれることが分かった。その段階で、3年後にはこのような事業協同組合を設立することを目標に、地元の事業者の理解を得ながら「出資してみたい」という事業者を3年かけて集めたという経緯がある。自分の地域おこし協力隊の活動もこのモデルの時期と重なっていたため、3年目に自分が事務局長となることが決まり、山形県や労働局、総務省と調整しながら、3年かけて地元の事業者を集めてスタートしたという経緯になる。

### Ⅲ 研究討議

(司会者) 第1分科会の2つの話題提供の内容を見て、率直にどう思われたか。恐らく、「この2つは社会教育なのか?」と思われたらどうか。「産業振興、自然保護の担当部門がやればいいのか」、「社会教育ではないのか」と思われたかもしれないが、よくよく話題提供の内容を聞くと共通する部分はある。それは、人と人とのつながりが必要になってくる分野だということである。小国町と東根市の事例も課題として挙げているのは、これを今後どのように継続していくかということである。

(庄内町) カクレトミヨの保全活動に関連して、庄内町にも戊辰戦争の時に官軍の鉄砲玉を防いだ御殿林という林があり、その環境保全活動をしている。近隣の建設会社からもボランティアとして来ていただいている。東根市でも、今後広くボランティアを募集するとのことであった。次の世代に伝えるという意味合いで中学生、高校生をボランティアとして参画を促していきたいが、その辺りはどのようにしているのか。



(井上氏) 中高生のボランティアの参画ということが東根市でも課題だと思っている。先日、地元中学校の学習発表会が

あり、校長先生から声がけをいただいて今回の話題提供と同様の内容を中学生に発表した。発表後にいただいた感想の中で「自分もこういう活動してみたい」、「ボランティアをやりたい」という声もあったので、そういう声も大事にしながら、今後、若い世代の参画について検討していきたいと考えている。

(司会者) 今後の社会教育を考えるうえで学校教育との連携は欠かせない。その中で、中高生、小学生も含めて、どう次の世代とつながっていくかを考えることは継続性を考えるうえで重要である。

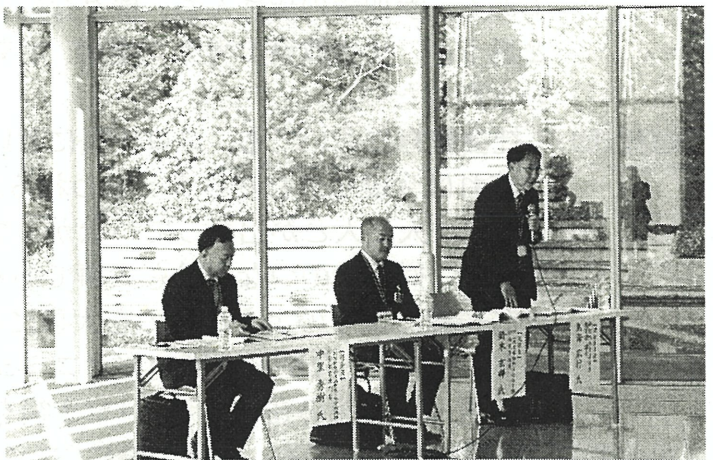
(山形市) 山形市では、この3年ほどですべての小中学校がコミュニティ・スクールとなり、学校運営協議会を含め活動をしている。学校から地域へお願いすることもあるし、地域と連携して子供たちを育てることを重視して各学校で対応しているところである。全体会でも披露された伝統文化に関するところも行っているし、地域の祭りにも参加している。本校の場合、山形市の馬見ヶ崎川の桜のライトアップの際に、地域の依頼を受けて子供たちが梅鉢太鼓の披露をしている。また、先日、山形市の研修会で静岡県裾野市の小田氏の話聞いた。「何もしない合宿」という取り組みを通じて、小学生、中学生、高校生とずっとつながって行って、それがやがて青年団、消防団へとつながっていくとのことだった。学校として何ができるか改めて考える契機となった。

(司会者) 学校教育とのつながりについて、越村先生いかがですか。

(越村氏) 今、地域学校協働活動ということで、様々な面で地域と学校とが結びついて活動を進めていくことが行われている。それは、単に地域が学校を支援するだけではなく、学校も地域に出て行って、地域づくりにも一定の役割を果たす、地域を元気にしていくということが求められている。そうした中で、地域の環境の問題について、地域住民とともに児童生徒と一緒に学ぶ機会をつくることが重要である。では、誰がそうした機会をつくるのか。学校と地域をつなぐ地域コーディネーターもそうだが、それだけではなく地域の公民館、コミュニティセンターが橋渡しをしながらそうした場をつくっていく中で、井上氏の話にあったように「自分もやってみたい」という子供が出てきたら、そういう子供を巻き込んで一緒に活動をつくっていくというのが自然であり、重要なことである。そういうところに、社会教育行政、公民館の役割もあるのではないだろうか。

(司会者) 今年6月に国が新しい教育振興基本計画を作成した際にも、公民館の機能強化が明記された。今後、社会教育における公民館の重要性はますます高まっていくと思われる。その点でいくと、吉田氏の事例でも継続性の担保というところにつながってくる。

(小国町) 吉田氏の発表を聞き、小国町のために大変なご苦勞をおかけし、様々な実践をされていることに感謝申し上げ敬意を表するところである。カクレトミヨの話もそうだが、いかに地域住民に参加してもらい、活動を広げていくかということが課題の一つである。吉田氏は、小国町の住民にどのようなことを期待するか教えていただきたい。



(吉田氏) 住民とともにどのように地域づくりをしていけるかということは常に考えている。私が小国町に移住した一番の理由は、小国町で生まれ育った多くの人々が、自分の地域を何とか後世につないでいきたいという思いで活動していることである。自分が小国町に住んで活動してきた3年間でも、町に住んでいる6千数百人の人々すべてと関わったわけではないし、まだまだ掘り起こせていない地域の魅力もあると思う。就業後や休みの日などに移住者と地域住民の接点をいかにつくるかということが、私たちが抱えている悩みである。地域で行われている地域行事、共同作業などに、たとえよそ者だとしても受け入れてくれる声がけ一つで変わってくると思う。何でもいいのでどんどん声をかけてくれると接点もつくれると思う。

(司会者) 山形県でも人口減少が進む中で、次世代への継承が課題となっている。そうした中で、他県からの移住者とどうつながるか、接点をつくることが社会教育の大きな課題である。

(尾花沢市) 井上氏にお聞きしたい。カクレトミヨの生息地とあるが、そこによその人がどんどん入ってきて魚を持っていってしまうということはないか。自分が小さい頃、尾花沢にもテツギョというきれいな魚がたくさんいた。しかし、最近は全然いない。一時、テツギョが話題になり、人が大勢入ってきて釣ってってしまったようだ。

(井上氏) 去年からカクレトミヨ保存連絡協議会の担当をしているが、今のところ魚を持ち帰ったという話は聞いていない。「昔は網ですくえば獲れた」という話も聞いたことがあるが、今は県の指定にもなっており、私たちが環境に手を加えるにあたって許可を得て行っている状況である。



(司会者) 周知・理解は必要な一方、それによってよからぬ考えを持つ人も出てくる懸念がある。そのバランスが難しいところである。参加者の皆さんも、様々な媒体、様々な方法で周知やPRを進めていると思うが、社会教育で考えた場合、有効な周知、理解というものがあれば教えていただきたい。

(越村氏) 社会教育においても、コロナ禍においてSNS等の活用が格段に拡がった。この流れは今後も進むだろうと思われる。一方で、社会教育における広報を考えたときに、人と人が出会ってつながっていく際に、オンライン上のつながりだけでなく、対面でのつながりも大事である。そう考えると、これまで発行されてきた公民館だよりのようなものを大事にしていく必要があるし、古典的かも知れないが、手で配りながら地域の方とコミュニケーションをとっていくというような血の通った広報の在り方が、コロナ禍を経て見直される時期にあると考えている。

(司会者) 時間はかかっても、社会教育においてはアナログ的な手法を残すべきではないか。その意味で2つの事例は手間や時間がかかっても効果を上げていると感じる。

## IV 助言

2つの事例とも、本分科会のテーマである「現代的課題等への対応」に挑んでいく素晴らしい取り組みだと感じた。

小国町の事例は、移住者によるマルチワークを1つの切り口にして地元の産業を持続的に発展させ、定住者、関係人口を増やしていこうという取り組みである。最近、SDGsがよく言われるが、吉田氏の取り組みは「8・働きがいも経済成長も」、「11・住み続けられるまちづくりを」にもつながっていくものである。東根市の事例は、地元の宝であるカクレトミヨという希少な魚が温暖化等の環境変化によって絶滅の危機に瀕する中で、住民、研究機関、行政の三者が手をつないで保全していこうという取り組みである。こちらも、SDGsに引きつけると「13・気候変動に具体的な対策を」、「15・陸の豊かさも守ろう」にも通じる。

両者とも、移住促進、地域活性化、環境保全の活動だと捉えているはずだが、一方で社会教育の取り組みであるとは捉えられていないのではないかと感じる。ただ、どちらの取り組みにも豊かな



学習活動が内在している。それも、単なる学習活動というよりも自分たちの暮らしや暮らしの基盤となる地域に関わる学習活動が両者の組織の中に豊かにあり、それこそが優れた社会教育実践、社会教育の活動である。本日ご参加の皆さんは、教育委員会、公民館、コミセン、社会教育委員など、どちらかという公的な立場で社会教育に携わっている方々である。公的な立場に身を置かれている皆さんにとって、今日の2つの事例は自分と距離感があると受け止めた方もいるのではないだろうか。どうやってこの距離感を縮めていけばよいのかをお話したい。

小国町の取組みで柱となるのは、移住者のキャリアアップサポートである。移住者が、将来、小国町で就職するのか、起業して定住の道を選ぶのか、或いは地元に戻って関係人口として小国町とつながっていくのかは分からないが、移住者が最初の3年間どのように暮らしたのよう生きていくのかは、4年目以降の選択に大きく影響を与える。小国という土地に来て、そこで大事だと思える人とのつながりができたり仲間ができたり、或いは小国というコミュニティの中で自分の役割が見出せることで、その人にとって小国町が第二のふるさとになる。そうなるかならないかが4年目以降の選択を左右する。吉田氏も地域のイベントを企画したり、地域住民との交流を仕掛けたりしているが、そこに公的な社会教育が関わることで、もっと面白い化学反応が起こっているいろいろな展開が期待されることになる。地元学の専門家たちは「よそ者の視点が必要だ」と口々におっしゃっている。そうであれば、小国に移住してきた人々を巻き込み、社会教育事業として小国の魅力を探す町内フィールドワークを行えば、地域住民にとってそれまで当たり前で価値を見出していなかったものが、移住者の視点を通して魅力の再発見につながり、さらにそうした活動を通じて地域住民と移住者のつながりも豊かになる。

東根市の取組みでは、公的な社会教育と協議会の取組みは距離があるのかという実はそのようではない。協議会は民学官の連携で組織されているが、そのコーディネートをしているのは行政である。また、カクレトミヨが市の魚に制定されてからは、公民館で絵画展を行ったり講演会を行ったりして、地域住民への周知が様々なつながりの中で行われている。この取組みを一過性のものにしないためにも、社会教育行政、公民館と協議会とが手を結びながら継続的に取組みを発展させていくともっと面白い取組みになる。例えば、温暖化、環境問題や、都市計画、まちづくりの問題など、カクレトミヨの背景にある問題を学習テーマの正面に据えて、公民館事業として展開すれば市民の学びがいつそう深まることにつながる。そのことが、自分たちのまちをさらによくしようという、自治意識の高まりにもつながる。



社会教育行政は、これまでも地域との様々なつながりを大切にしてきたが、これまで以上に意識的につながりをつくること、社会教育行政と吉田氏のような移住者、協議会が対話を重ねて行政や公民館は何をすべきか方向性を見定めていくことが、地域課題解決に向けて重要なポイントになる。

# 第2分科会

テーマ

## 学習機会・学習環境の充実

会場：荘銀タクト鶴岡  
小ホール

視点

地域住民にとって魅力的な学習プログラムの企画・運営や学習環境の充実をどう図るか。

話題提供者

○ケイクスデザインオフィス

代表 大沼 兄昌 氏

○舟形町教育委員会教育課社会教育係

主任 渡辺 伸雄 氏

助言者

○東北大学大学院教育学研究科

准教授 松本 大 氏

運営責任者

○庄内町教育委員会社会教育課

課長 樋渡 真樹

司会者

○最上教育事務所社会教育課

主任社会教育主事 八城 良美

記録者

○最上教育事務所社会教育課

社会教育主事 高橋 裕美



## I 話題提供

### 地域をもっと知りたくなる きっかけづくり

大江町 ケイクスデザインオフィス / OE REPOWER PROJECT 代表 大沼 兄昌 氏

#### 1 はじめに

2011年以来、個人または団体で大江町の活性化活動を行ってきた。色々な分野の「地元のすごいもの」をピックアップし、エンタメ系の切り口で参入ハードルを下げ、大江町ってすごい！と感じてもらえるきっかけになるコンテンツ作りを目指している。

#### 2 具体的な取り組み

<大江町の博覧会シェイクラボ>

「温故知新」と「大人の文化祭」をテーマに、農業、食文化、産業、歴史、伝統文化、学校教育等さまざまな分野の Made in 大江町を集め展示や体験を行えるブースを集めた。

<大江町の新しいおみやげ『十八才』Tシャツを作ろう！>

書道用具一式をブースに置き、参加者には思い思いに「十八才」の字を墨と筆で書いてもらう。イベント会期中に集まった応募作品の中から最優秀作品を商品化した。

<百物語 ～大江町の怪談・奇談～>

地元のお寺を5日間にわたってお借りし、地域に伝わる伝承や怪談、不思議な話を「百物語」形式で語り合った。

<左沢小学校 児童作品展>

子どもたちが学校で日頃取り組んでいることを地域で展示した。

### 3 活動等の成果

地元からは「思っていたよりも大江町には色々なものがあるんだね」「地元だけに行く機会がなかった（これまで作らなかった）場所に初めて足を運ぶきっかけになった」という声、移住者および町外の方から「大江町ってすごいものがたくさんあるんですね！」と褒めてくれる機会が少しずつ増えてきた。地元高校のボランティアや地域学習の研修先としてもご活用いただき、若い世代や子育て世代に向けて地元を目を向けるきっかけ作りとしては一定の成果を上げられた。

### 4 今後の課題

結婚、出産などに代表されるライフステージの変化により、地域イベントや地域活動と一緒にしてくれる仲間が減る（いなくなる）ことに常に悩み続けてきた。また同様に、学生と一緒に活動するのもにも期間に限られるため、立ち上がったプロジェクトを引き継ぎ、事業として無理なく継続できる前提の体制づくりが必要だと感じる。

また、団体を作っても、自地域を良くしたいという曖昧な目標だけでは個々人の意識の差があり、長続きしない。また活動コスト等の問題から個人で行うのにも限界がある。今後は地域や他団体と連携するなど、安定した運営体制の強化、企画効果を高めるための効率化を重視し、計画的に活動、工夫を行っていきたい。

## 舟形大人塾による生涯学習の推進

舟形町教育委員会社会教育係 主任 渡辺 伸雄 氏

### 1 はじめに

舟形大人塾は、「塾生の主体的な意見交換」「町の将来像を考える」「大人の活力の見直し」をテーマに大人として幅広い分野の学びの創出と、町教育目標である「地域に育ち、地域を育てる町民の育成」を目指した事業である。

### 2 具体的な取り組み

#### (1) 塾生の募集について

実行委員会で協議した年間活動のチラシを町内全戸で配布し、講座に参加する「塾生」を募集する。塾生の制限はなく、町内の大人であれば誰でも自由に参加ができる。

#### (2) 開講式の開催について

舟形大人塾では、第1回目の講座で「開講式」を行い、舟形大人塾を開催する意義や目標を塾生に伝え、主体的な学びに繋げるとともに学習意欲の向上を図っている。

#### (3) 主な講座について

【講話、意見交換会】 町長、副町長、地元高校生、地域おこし協力隊 etc...

【公開講座】「再生可能エネルギーと舟形町の可能性」／東北芸術工科大学

「博物館から～これからを考える」／山形県立博物館長

「過疎農山村の価値を考える」／早稲田大学名誉教授

「まちづくり講演会」／聖徳大学名誉教授

【文化】 縄文の女神まつり記念講演、町内の文化財や史跡巡り

【大人の遠足（町内）】 企業訪問、生産者訪問、観光名所、工芸体験

【大人の遠足（町外）】 県内外の歴史・文化施設や観光施設の見学

まちづくりの先進地視察

### 3 活動等の成果

#### (1) 学習成果

各講座を通じて、塾生による自由な学びの機会の実現と大人としての活力の向上に繋がっている。

#### (2) 意見交換・懇親会

全ての講座終了後に実行委員会で反省を行うことで、講座に対する活発な意見交換や新しい学びのアイデアが生まれ、次回の講座に向けた内容に反映している。

#### (3) 実践、行動

舟形大人塾で学んだ知識を活かし、家庭や地域で実践することで、知識の定着と活用に繋がっている。



### 4 今後の課題

これからも塾生の講座への満足度を高めるとともに幅広い年齢層に合わせた学びの機会を創出していくことが課題である。また、リピートの塾生が多い反面、新規の参加者が少ないことや実行委員会としての担い手不足も懸念されている。そのため、塾生のニーズを反映した講座の開催やリモートを活用した運営方法の検討、そして講座に参加している塾生から次世代の実行委員会の担い手を育成することなどが求められる。

## II 質疑応答

### 【大江町 ケイクスデザインオフィス 大沼氏への質問】

Q：イベント運営に関わるメンバーをどのように募っているのか。(司会者)

A：当時仙台に住んでいたため、信頼できる地元に住み続けている同級生などを頼りに、(大沼氏の) 考えに呼応した仲間を集め、さらに、メンバーにはならないが、様々な分野の知識を持った協力者を紹介してもらっている。

Q：2020年、2022年、大江町で大規模な水害があった。大沼さんはその水害の現場を町内外の方々と視察されたが、どのような思いだったか。(大江町)

A：54年前にも水害があったが、原体験をされている人がいなくなってきた。川周辺には様々な話があるが、埋もれている状態。実際に災害が起きた時、昔からの知恵が活かされている家庭とそうでない家庭があった。次の災害に備え、「命を守る教訓」を伝えていきたいと思った。

Q：(イベントの案内の中に) 興味を引く、モチベーションの上がるワードが多い。すばらしいアイデアを出す秘訣は何か。(上山市)

A：アイデアをレトロなものに求めることが多い。今まで一度もその発想が出てこなかったものはないと思う。例えば、200年前にやったものを現代で、当時とは違う新しいツールなどを用いてやってみると、それは「世界初」になる。昔の新聞におもしろいことが転がっていたりする。決して新しいアイデアではないが、わざわざ今までピックアップしてこなかっただけで、みんなが求めていることがうまくかみ合うと、それに関連して次々にいろいろなアイデアが出てくる。

Q：大江町と大沼氏はどのような関係か。(鶴岡市)

A：最初は完全に「個人」だった。その後、個人事業主になり、いろいろな町の業務を委託されるようになった。名刺を使い分けている状態で、「一町民」として、自分の町を良くするための提案をしている時と、今まで培ってきた専門的な仕事をする時とがある。

**【舟形町 舟形町教育委員会社会教育係 渡辺氏への質問】**

Q：高校生を巻き込んで取り組んでいるが、どのように高校生を集めているのか。また幅広い年齢の方が参加しているが、どの年齢層をターゲットにしているのか。(庄内町)

A：町の高校生ボランティアサークル「ふなっ子」に声がけし、サークルのメンバーとその友達などに参加してもらっている。参加者の多くは退職した後の年代で、子育て世代は忙しく、参加者が少ない。リモートなら参加できるという人もいるため、オンライン参加やYouTubeで配信なども考えていきたい。

### Ⅲ 研究討議

(司会者) 魅力的なプログラムをつくるにはどうしたらいいか。こだわったところなどを教えていただきたい。

(渡辺氏) 塾生・実行委員の意見を反映させる。実現可能な限り、講座に盛り込む。

(大沼氏) デザイナーの先輩に教わったのは、自分が求めているサービスは、同じようなことを考えている人にも刺さるため、自分が欲しいものやこうなったらいいと思うものを箇条書きにしてみるということ。その中から実現可能なもの(予算やメンバーなど)を考えていくことで芯の通った企画になる。

(司会者) 参加者のみなさんの中から、実践を紹介していただけませんか。

(河北町) 「かほく町民大学ひなカレッジ」の講座を16人の町民の実行委員で企画・運営している。自分たちがやりたいことを中心に企画・運営してきたが、アイデアもなくなってきた。受講生が求めているものは何か、社会の状況を考えながら企画するようにしている。若い人を企画側に入れるにはどうしたらよいか。

(司会者) 学習環境の充実という点ではどうか。大江町では、東北芸術工科大学の大学生の協力を得ている、舟形町では専門の講師を招いている、実行委員がやりたいことをやる、などの話があった。

(大沼氏) 環境の充実もそうだが、企画がよければ参加者は集まる。みんながやっているようなことは個性がなく魅力的に見られない。土台がしっかりしたうえで、他団体との活動の違いがあると目立つ。また、いろいろな制度を活用し、お金(補助金など)があれば挑戦してみようと思える。

(渡辺氏) 「やらされている感」があるとモチベーションが下がる。行政は、頑張っている団体に、率先してやれる環境を支援することが大切。

(司会者) 以前、企画に関する講習を受けたことがある。マーケティング分析、ポテンシャル分析が大事。地域の課題やニーズを把握し、地域の資源を分析することが必要ではないか。



## IV 助言

大変刺激を受けた発表だった。キーワードは、「興味・関心」。「興味・関心」は私たちの工夫次第で促すことができる。そのために、どのようにして「興味・関心」をつくっていくのか、大沼さんの実践が大変参考になった。大沼さんの実践の中で強調されていたのは、楽しいきっかけを作ること、参加のハードルを下げ、最初の一步を踏み出せることが大切だということ。自分にもできそうだと思う仕掛けが素晴らしい。

舟形町の実践では、「楽しそうだ」ということを、住民が実行委員会方式で話し合っ



めしている。大沼さんは、自分がおもしろいと思うことだけでなく、人のため、地域のために何が必要かを考えた上で、こうすればおもしろいのではないかということも踏まえて考えている。その上で自由な発想をしていくのだが、その基本には「温故知新」があり、昔のことも大切にしながら考えているところが素晴らしい。

大江町、舟形町の2つの実践に共通していたのは、自分たちが暮らしている地域を題材にしているという点。題材は身近なところにあり、暮らしている地域が学習の題材になっている。

舟形町の取り組みは、話し合い、実践、振り返りを繰り返している。

では、どのようにすれば参加者は「ハマって」いくのか。

1つ目は、学習の成果を形にすること。舟形町の実践なら、地元について調べたことを冊子にまとめたりするなど、成果物があってもいいのではないか。TKF（つくって、かたて、ふりかえる）をプログラムの中に入れると、学習が盛り上がりと言われている。

今後に向けて、連携をどのように広げていくのかがポイントになる。連携を広げることで学びの循環を作ることができると考えられる。例として、以下の5つが挙げられる。

- 例1：公民館等のほかの講座や学級、サークルと連携・交流をする（ヨガ教室と怪談、料理教室との連携など）
- 例2：学校を巻き込んだネットワークの中に活動を位置づける
- 例3：ほかの世代や講座も含めた大括りの講座を作る（自治体の中で「〇〇学」のような、地域を学ぶ体系化された講座をつくることで、地域全体の動きをつくる）
- 例4：たてのつながりを作る（高校生と大人との連携など）
- 例5：地域外との交流（地域の外に出て活動するなど）

行政の役割として、大沼さんのような活動をいかに支援するか、また、大沼さんのような人をいかに育むかということ意識しなければならない。地域づくりを進めていくには一緒に活動をする仲間が必要で、地域に住む人々のネットワークが重要であるが、地域に住む人々だけでなく、地域に縁のある人も広く含めて参加できるような仕掛けがあると、より参加者が増えていくのではないか。

# 第3 分科会

テーマ

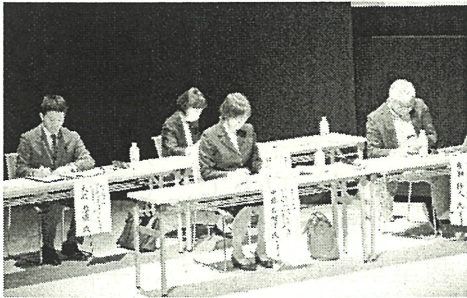
## 関係機関等との連携・協働

会場：荘銀タクト鶴岡

大ホール

視点

地域住民・各種団体・学校・関係機関等  
との連携・協働をどう進めていくか。



**話題提供者** ○最上町教育委員会教育文化課生涯学習室  
主事 結城 歩 氏

○温海中学校地域学校協働本部  
地域学校協働活動推進員 古舘 由隆 氏

**助言者** ○一般社団法人とちぎ市民協働研究会  
代表理事 廣瀬 隆人 氏

**運営責任者** ○酒田市教育委員会社会教育課  
課長 前田 聡子

**司会者** ○村山教育事務所社会教育課  
主任社会教育主事 伊藤和賀子

**記録者** ○村山教育事務所社会教育課  
社会教育主事 大泉 泰俊

## I 話題提供

### 最上町地域学校協働活動の取り組み

最上町教育委員会教育文化課生涯学習室 主事 結城 歩 氏

#### 1 はじめに

森が人をつなぐ町最上町。山形県の北東部に位置し、周囲を山々に囲まれた自然豊かな町である。町の色が緑色とされるほど緑あふれる最上町では、四季の移り変わりを楽しむことができる。そのような最上町での、地域学校協働活動は主に「放課後子ども教室事業」「町内小学校・幼児施設にての家庭教育支援事業」「地域住民による学習支援」「地域コーディネーターによる図書室環境整備」の4つである。また町内の小学校は、地域の皆さんが先生として、最上町のことについて学習する場でもある。

#### 2 具体的な取り組み

##### ○放課後子ども教室事業

町には「ワイルドエドベンチャースクール」「わんぱく学校」の2つの放課後子ども教室がある。田植えや稲刈り、野菜収穫や野菜販売体験など自然体験をメインとした活動を行っている。町内の企業訪問や収穫感謝祭、異国文化体験やものづくり体験など自然体験以外の活動も行っている。活動の準備、サポーターは全員町内の地域住民が担っている。

##### ○家庭教育支援事業

「やまがた子育て講座」や「幼児共育ふれあい広場」を活用し、毎年町内小学校と2つの幼児施設で保護者向けの講演会や、幼児と保護者が一緒となって体験する活動を行っている。やまがた子育て5カ条の普及啓発も行い、家庭教育の機会の提供に努めている。

## ○地域住民による学習会

中学生を対象とした学習会「もがみサポート塾」は、毎週月曜日、水曜日、金曜日の放課後に中学校の教室で実施している。先生は地域住民で、教員を退職した方や役場職員OBなどが主なメンバーである。

## ○地域コーディネーターの活動

地域コーディネーターの主な活動内容は、図書コーディネーターとして、図書室の環境整備や児童生徒の読育推進、「もがみサポート塾」のコーディネーターとして学習支援員などの連絡や学校との打ち合わせである。

## ○地域学校協働活動

地区に児童が出向いての学習会、学校における裁縫などの授業、スキー授業など、子どもたちと一緒に楽しく学習している。

## 3 活動等の成果

小中学校に上記4名の他、放課後子ども教室事業に4名の地域コーディネーターが配置されている。各学校の図書室は、本屋さんに来たと思うぐらいのレイアウトで、そこが図書室の利用拡大に繋がっている。学習支援についても、年々多くの参加者が見られ、学校の授業以外の学習の場の提供に繋がっている。放課後子ども教室事業についても、学校では体験できない活動を考え、楽しみながらも学習の場となっている。

## 4 今後の課題

学習支援員の高齢化と成り手不足が課題となっており、地域コーディネーターの発掘と育成を進めていきたい。地区や県の研修会などの参加を学校、教育委員会で促し、役場職員OBや退職した教員に進んで声を掛けていきたい。

## あつみ地域未来塾の取り組み

温海中学校地域学校協働本部地域学校協働活動推進員 古館 由隆 氏

## 1 はじめに

鶴岡市温海地域は、海から山まで集落が点在する、漁業・林業・稲作農業と、観光地としてあつみ温泉が存在する地域である。温海地域の人口は、平成12年には10,608人だったが、令和5年5月時点で6,304人と、22年の間に約4割もの人口が減少している。子どもの数も減少し、小・中学校の統廃合が進み、現在、温海地域の小学校は2校、中学校は1校のみとなっている。生徒のほとんどがスクールバスで通学しており、同じ集落に同級生がおらず、一人で勉強しているケースも多い。希望校に進学するために学習塾に通いたいが、市街地まで車で30分以上かかる位置にあるため、学習塾に通うことをあきらめてしまう家庭もある。そこで、地理的要因により学習塾に通うことが困難な中学3年生を対象に市と地域住民が連携しながらあつみ地域未来塾を開講し、学力向上に取り組んでいる。

## 2 具体的な取り組み

## (1) あつみ地域未来塾の開催

対象者：中学3年生の希望者対象。

時 期：例年9月中旬から2月下旬まで毎週土曜日の午前9時から12時

会 場：温海ふれあいセンター



講師：温海地域住民、温海中学校で教壇に立っていたことがある教師OB、学生など

教科：2つのコースから受講生が事前に選択し隔週で受講。

特に学力差が大きい数学と英語は基礎コースと応用コースに分け、受講生の学力に合わせた講義内容で実施。

運営：市の職員、地域学校協働活動推進員、地域おこし協力隊などが連携

一昨年度までは雪で会場まで通うことが難しい山間部の福栄地域では、サテライト講義としてネット回線を使用し、動画で講義を生中継して実施。

### 3 活動等の成果

受講生へのアンケートの回答より、おおむね好評であることがわかった。特に【あつみ地域未来塾を受講して実力が向上したと思いますか。】という質問に対して、年度を追うごと、「向上/やや向上」の回答が増えており、受講生の学習能力向上に少なからず貢献できたものと考えられる。また、「教えてくださる先生たちが受講生1人1人に寄り添ってくださりうれしかったです」との回答が複数あり、細やかな対応があつみ地域未来塾でできたものと感じる。学校外の活動で学校の友達と会える貴重な機会として、あつみ地域未来塾の受講を楽しみにしている受講生、やる気につながっている受講生も一定数いる。温海地域内の方から「今日は塾か、頑張ってるね」と声を掛けられることもあり、少しずつ地域内でもあつみ地域未来塾について認知されてきている。

### 4 今後の課題

講師や地域の推進員の方々など、多くの協力を得て運営しているが、人材不足が課題となっており、安定した運営を行うためには人材の確保が必要である。今年度から家族送迎を基本としているが、各家庭の事情や冬期間は天候の影響により送迎ができず受講できない生徒も少なくない。現在、話題となっている「ライドシェア」が法的に整備された時などは、それを活用できればと考えている。あつみ地域未来塾の受講生負担の保険料のあり方、子どもの数の減少に伴う開催規模など、安定した運営をするための検討も必要である。

## II 質疑応答

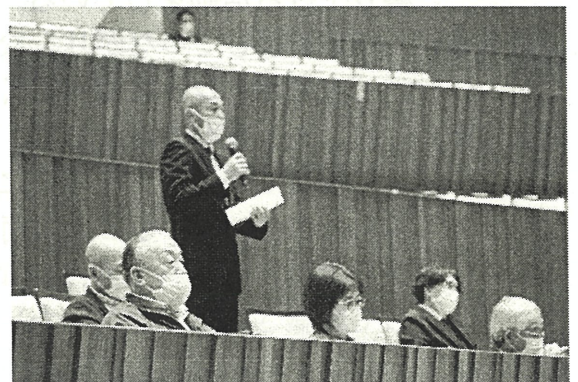
【最上町教育委員会教育文化課 結城氏、温海中学校地域学校協働本部地域 古舘氏 両名への質問】

Q：お二方の地域内に放課後児童クラブはあるのか。ないとすれば、保護者に負担がかかるのではないかと。（大会顧問 熊澤氏）

A：町内には、大堀小学校と向町小学校があるが、それぞれの地域に1つずつ放課後児童クラブがある。大堀地区の場合は大堀地区公民館内に放課後児童クラブがある。そのため、夏休みは、放課後児童クラブの子どもたちと一緒に放課後子ども教室の活動を行うといった連携を行っている。

（最上 結城氏）

A：温海地域にも学童はある。遠方からスクールバスを使って通学している児童が多いため、使える家庭は多くないのではないかと予想できる。保護者の負担は今後も増えていくことが考えられる。（温海 古舘氏）



Q：外部の方がサポーターや講師等で活躍されているが、サポーターに万一事故にあった場合の保険には入っているか、また、謝金等の報酬がでているのかお聞きしたい。併せて、野菜販売体験の売上金はどのように使っているのかお聞きしたい。（上山市）

A：放課後子ども教室や学習会、地域コーディネーターの方は、町の方でスポーツ安全保険に全員加入している。謝金についても町の方から支出している。大堀地区の場合はNPOの方に委託をしているので、そちらで支出している。地域学校協働活動で参加している保護者の方々には少し謝金を支出しているが、より予算を確保していきたいと考えている。野菜販売の売り上げに関しては、子どもたちが使いたいような形で使っていく。例年、ユニセフなどに寄付をするなど子どもたちが話しあって決めている。（最上 結城氏）

A：謝金は市の規定に従って推進員の方にお支払いしている。（温海 古舘氏）

### Ⅲ 研究討議

（司会者） 今回の二つの事例は地域学校協働活動を通しての地域課題への取組みだった。地域コーディネーターの役割をしている方が学校と地域のつなぎ役としていたり、未来塾を通して保護者を巻き込んでいたりするなど、「大人同士のつながりを作る」ことに取組んでいた。「地域づくりをしていく中で、人と人とのつながりをどうつくっていくか」を柱として協議を行いたい。社会教育にはモデルもテーマもない。参加されている方々も地域のニーズを受けて様々な実践をされているかと思う。ここで皆様からの実践をお聞かせいただきたい。

（最上町） 大堀小学校では、畑を教えてくれるおじいちゃんやおばあちゃんが「畑楽会」をつくった。学校を助けて終わりではなく、活動団体になって自分たちで教頭先生と相談しながら好きな時間に活動していたり、子どもたちと一緒に草むしりをしたりする。また、大堀地域の秋祭りの実行委員会にPTAの役員が入ることになった。学校職員としては、地域の方から見る視点もすごく大事なのかと思う。

（酒田市） 日向地区は、酒田市の合併に伴い、小学校も八幡小学校に統一された。中学校も鳥海八幡中学校だけで旧八幡町には2校しかない。日向地区には大運動会と秋祭りの二大事業があり、コロナ前は300人程集まったときもあった。その中で、小学生から高校生の皆さんから一役ずつ担っていただき、地域のみんなが一緒になって活動してきた。今年は、4年ぶりに運動会が開催され、みんなに協力してもらっている。そのつながりをなくさないように事務局を始めとして、みんなで盛り上げる活動をしている。

（司会者） 行事を通してつながりをなくさないようにしていくことが、今後、持続させていく上でポイントになってくるのではないかな。

（上山市） お二人と重なる点として、学校が統合になった点が挙げられる。家庭科のミシンの授業で地域の方を学校に呼びたいと考え、20回程実施したが、実際に来てくれた方は、もともと上山南小学校の地域の方だけで、統合した他の3つの学区から参加してくれた方はいなかった。どうすれば統合された学校が地域の学校として認識されるのか伺いたい。

(司会者) 統合するにあたり、地域の捉えをどう広げていくかも大きな問題と考えられる。

(廣瀬氏) 統廃合そして、地域から学校がなくなっているのにも関わらず、「学校を核とした地域づくり」をスローガンにすることに疑問を持つ人もいるかもしれない。小国町でも統廃合が進み、学校が1つになった。2つの地区は学校もなくなり、子どももいなくなった。そこで渋谷コーディネーターは、1年に1回地元の子どもたちが、たくさんの同級生を連れて戻ってきて、対面活動をするというプログラムをつくった。年に1回子どもが地域に戻ってくると、地域の団体が受け皿になって団体の活動が活性化することになった。「学校に來い」という発想はよくない。こちらから「出向いて行く」あるいは、こちらから「近づいていく」という発想を持つことが必要である。

(山形市) 人と人とのつながりをどうつくるかということで実践を一つ紹介したい。山形市の高瀬地区に映画の上映会を開催している「たかせ元気会」という地域団体がある。その団体の活動で課題になっていたのは、世代間交流だと伺っ



ていた。昨年、団体の方から、中学校を会場にできないか、小学生を対象に紅花をテーマとしてワークショップができないか、中学生にボランティアとして参加してもらえないかという相談があった。そこで、中学校と小学校の学校運営協議会で話題にしてみてもどうかと提案した。地域団体と学校運営協議会の橋渡しをする役割を担ってくれたのは地域学校協働活動推進員だった。学校運営協議会を活用することで、地域団体と学校とが関係協働した活動になった。学校運営協議会という場を活用することで、人と人とのつながり、組織と組織のつながりが生まれることを感じる事ができた。

(司会者) コミュニティ・スクールが進みつつあり、学校運営協議会が地域とのつながりを生み、地域づくりにも生かされていくのではないかと。

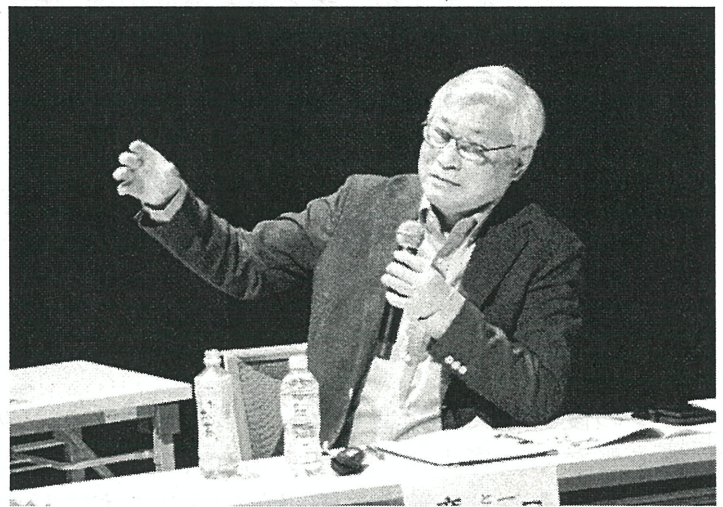
## IV 助言

2つの優れた実践報告を聞くことができありがたかった。この事業の主たる目的は学校支援でもなく、青少年の育成でもなく、「学校を核とした地域づくり」である。学校支援が目的だと考えたり、学校応援団を作ることだと理解したりする人は失敗する。どうして学校を支援しなくてはいけないのかと声が出ている地域が多くある。では、「地域づくり」とは何か、それは、人と人とのつながりや知人や友人を増やすことである。学校を支援しても良いし、学習塾をしても良いが、そのこと通じて地域の大人が繋がったかという観点が必要である。地域づくりのことを課題解決だと解釈している人も多いが、誤っている。人と人とのつながりをつくることができれば、課題解決しやすくなって、社会生活もしやすくなる。高齢になって一人暮らしでも安心して暮らしていけるし、友達がいれば助けてくれる。そういう人をつくるのが社会教育なのである。謝金と人集めは関係しておらず、本質ではない。一生

懸命活動している人を見て、自分も手伝いたいなど感じる人をつくるのが社会教育なのである。人手不足は社会教育の怠慢である。どうしてお祭りやイベントをするのかというと、お互いが顔見知りになって一緒に汗を流して、「お互い様の人間関係」をつくるためだ。人と人をつなげるためには接着剤が必要である。その接着剤とは、結城さんが行っている子ども教室や家庭教育支援事業である。あるいは、温海の地域未来塾である。セミナーや行事、お祭り、趣味、教養、娯楽、それらは全て接着剤なのだ。私たちは先祖から受け継いだ大事な人と人をつなぐ接着剤を手放そうとしている。それではいけないと思う。

では、地域学校協働活動とは何か。それは、子どもと大人と一緒に活動するということである。学習塾に高校生を連れてきたというのは極めて良いと思うし、地域の課題を見付けることも良いと思う。その中で大人のつながりを強めていくのが地域学校協働活動である。2人の実践は、集落支援員や他の課のスタッフ、役場の職員など、多くの人たちが関わることのできる仕組みをつくっている。これが社会教育なのだ。もう一つのキーワードは「地域の良質な大人と子どもを出会わせること」である。地域の良質な大人と子どもが出会えば、子どもは必ず「古館さんのようになりたい」「結城さんのようになりたい」と書くようになる。それが地域の教育力なのだ。地域の良質な大人は主に公民館にいる。だから地元の公民館を大事にすべきなのだ。対話的で深い学びは公民館に行って良質なおじさんと出会えばできる。どうして新しいことをするのか。今していること、先祖が今までやってきたことの中にこそ、大切なダイヤモンドが存在している。文科省の説明を読むと、地域学校協働活動とは「様々な活動である」と書かれている。何の説明にもなっていないが、それが最大のヒントだと思う。地域ごとに決めて良いし、誰かにとやかく言われることもない。だからこそ、今あることを大事にしてほしい。山形県では長い間、地域にこだわってきた。新しいことをしなくても良い。今ある事業にくっ付けるくらい、1+1は太った1にするくらいの気持ちでないといけない。人口が減っている、担い手が少ない、子どもも減っている中で、これ以上事業を増やすのは適切ではない。今やっていることに地域性を加えるだけで地域学校協働活動になると思う。このように、既存の事業を地域学校協働活動にする、今やっていることを大事にする、これを大切にしてほしい。学校の行事に地域の色と味を付ける。このようなことで十分だと思う。ヒントは、地域の祭り、地域の歴史、文化、文化財である。

良い学校は良い地域にしか存在しない。良い地域の良い学校に赴任した先生は「この学校は楽だ。余計なことをしないで、教育に専念できる。」と言う。そのような学校は地域の住民がつくるのである。それこそが「学校を核にした地域づくり」である。地域のつながりをしっかりつくれば、良い学校になっていくのだ。社会教育と学校教育は両輪のように存在しているのではなく、ぐちゃぐちゃになって存在しているのだということが、今回のお二人の実践で確認することができた。



# 第4 分科会

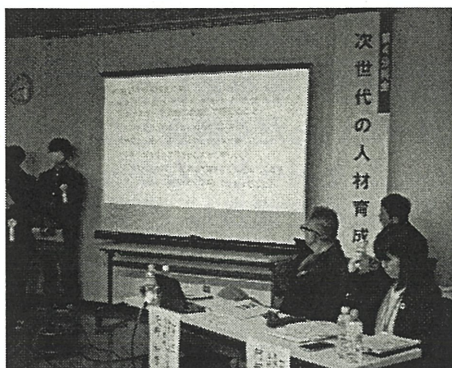
テーマ

## 次世代の人材育成

会場：鶴岡市役所  
6階大会議室

視点

社会の変化に対応する地域の人材を育成  
するために、社会教育事業をどう仕組むか。



- 話題提供者** ○三川町教育委員会教育課社会教育係  
生涯学習推進員 菅原 知子 氏  
○南陽青年団  
団長 小田 朝暉 氏
- 助言者** ○福島大学人間発達文化学類  
特任教授 天野 和彦 氏
- 運営責任者** ○鶴岡市教育委員会社会教育課  
課長 沼沢 紀恵
- 司会者** ○置賜教育事務所社会教育課  
主任社会教育主事 阿部 文
- 記録者** ○置賜教育事務所社会教育課  
社会教育主事 秋山 憲司

## I 話題提供

### 三川町中高生ボランティアサークル来夢来人の取り組み ～地域で育ち、地域に還す、中高生の成長～

三川町教育委員会社会教育係 生涯学習推進員 菅原 知子 氏

#### 1 はじめに

三川町在住者を中心とした中学生・高校生の有志で結成しているボランティアサークルであり、昭和63年9月の発足以来30年以上、三川町を主なフィールドとして活動を続けている。令和5年度は58名（中学生41名・高校生17名）。特にコロナ禍以降は、会員数が50名前後を推移し、社会情勢の変化に応じた中高生のボランティアに対する意識の変化が表れている。事務局を置く三川町教育委員会社会教育課教育係は、令和2年7月にオープンした『三川町子育て交流施設テオトル』内にあり、併設する子育て支援センターや学童保育所と連携をとりやすくなったことも、活動活性化の起爆剤になった。

#### 2 具体的な取り組み

##### (1) 保育園幼稚園訪問『わんぱく園児とあそぼう』

年間約10回の日程で訪問し、奉仕活動（園内清掃、玩具消毒等）と希望保育利用園児とのふれあい遊びを行う事業。

(2) 子育て支援センター訪問

コロナ禍でも会員からは「小さい子との交流を続けたい」との声があがり、実現した新しい定期活動。年間約10回の日程で、窓磨きや看板づくり、来館者との交流。

(3) 町事業への参加・協力

発足当初から町主催事業（特に社会教育事業）への参加など、地元へ根ざした活動を継続してきた。（フェスティバルぎっこしめ、みかわ秋まつり、だがしや楽校 他）

(4) 新しい取り組み『RE:プロジェクト』

令和3年度から来夢来人が発起人となり地域を巻き込んだ活動として開始。『東北公益文科大学地域共創センター』コーディネートの下、外部団体と連携し、赤川の河口と海岸のごみ拾いをして内陸部と海洋ごみの関係を体感し考える活動。

### 3 成果

乳幼児・児童との交流活動については「2020年度こころを育む総合フォーラム“子どもたちのこころを育む活動”」優秀賞、「令和4年度輝く県民活躍大賞」を受賞した。受賞の話題は、改めて町民の方々に来夢来人の存在や価値について知っていただく機会となり、サークル会員の自信となって、ボランティア活動に対するモチベーションへとつながった。中学生の時から在籍している高校生会員はサークルをリードする存在へと成長し、全体を見てリーダーとして活躍し、中学生の会員が背中を追うという良い循環が生まれている。小さい頃から地域の事業に参加し、成長とともに協力者⇒参画者⇒主催者へとステップアップしながら、地域で育てた自らの力を地域に還元するという姿が来夢来人の中には生まれている。



### 4 課題

『継続』。サークルとしての今の良い形を維持しながら、さらに中高生が自主的にボランティア活動に挑戦できるよう、町としてサポートを続けていきたい。また、中学生として来夢来人に所属していた会員が高校への進学・進級を重ねるたびに参加するのが難しくなってしまう。組織全体としての『継続』と会員個人としての『継続』が積み重なっていくようにすることで、さらにパワーアップした来夢来人を見ることができるともかもしれない。

## 南陽青年団の取り組み

南陽青年団 団長 小田 朝暉 氏

### 1 はじめに

南陽市に縁のある有志の青年たちが集まって、令和3年3月に発足した任意団体。現在、10代から40代の高校生、大学生、社会人ら25名が加盟。

#### ・団発足のきっかけ

平成29年度に市が開催したイベントで、まちづくりアイデアを競わせる賞金付きのコンペを実施するために、約9ヶ月間にわたってワークショップやまちづくり活動を実践した。このイベントに市出身・在住・在勤などの青年60名以上が参加し、9つのグループに分かれてアイデアを競

った。コンペを終えてからもつながり続け、公に活動を始めるにあたって南陽青年団を発足させた。

#### ・団の目的・現在

「青年の豊かな人間形成を図り、青年活動の向上と郷土の発展に寄与し、参加者相互の親睦を深めるための活動を行うこと」を目的として活動。スピリットは、あくまで「ゆるく」。とにかく「楽しく」。活動開始以来、市教育委員会社会教育課とは協力関係にある。

## 2 具体的な取り組み

### ①置賜地区高校生まちづくりワークショップ

市青年教育推進事業実行委員会(事務局:市社会教育課)と共催。置賜地区の高校に通う高校生を対象に、まちづくりとは何か、地域のつながりとは何かを考えるワークショップを実施。



### ②きくら祭

市の伝統行事である「南陽の菊まつり」とのタイアップイベントとして今年度で5回目。地域のつながりを活かし、飲食店の出店や、工作などの体験ブース、はたらく車の展示などを行うお祭りで、県外の青年グループや大学生と交流する機会にもなっている。

### ③なんよう雪灯かりまつりへの協力

市観光協会が主催するイベントへの協力(アイデア出し、雪灯籠や雪像などの会場作り)。

## 3 活動等の成果

### ①R5 高校生まちづくりワークショップ アンケート

「都会と比べ置賜地域にはどれくらい魅力があると思いますか？」

(事前)【すごくある 2:まあある 14:少ない 11】 ⇒ (事後)【すごくある 18:まあある 5:少ない 3】

### ②きくら祭

来場者約 1000 人の年もあり、青年団の活動周知の場になった。「この子の生まれて初めての祭りかこれです」という参加者の声もあり、コロナ禍での人々の憩いのイベントにもなった。

### ③その他

以前青年団イベントに協力してくれた高校生がイベント後に南陽青年団に加入。地元企業の会長が世話役となり青年団後援会が発足(地域の若者は地域で応援する機運)。職場でも家庭でもない第3の居場所として、青年自身の居場所になっている。

## 4 今後の課題

現在、活動への参加状況が団員でまちまちであり、各団員のプライベートと青年団活動のバランスを取るのが難しい。団員一人一人が居心地良いと思える居場所であり続けることと、組織として楽しい活動を続けていくことをどう両立していくかが今後の課題である。また、現在社会人がメインで行っている青年団の運営のありかたを含め、南陽青年団スピリットをどのようにして若い世代に引き継いでいくかも課題になっている。

## Ⅱ 質疑応答

### 【三川町教育委員会社会教育係 菅原氏、南陽青年団 小田氏 両氏への質問】

Q：高校生の募集方法を教えていただきたい。(長井市)

A：中学生については、毎年4月に全校生徒にチラシを配っている。高校生については、中学校でサークルに入っていた子がそのまま継続したり、友達に誘われて入ったりしている。チラシ作成において一番大事にしていることは、硬い表現の文章にはせず、楽しさをアピールできるようなデザイン、内容にしているということ。集まる機会がある度に「友達誘ってきて。誰でも誘っていいから」と声掛けしている。(三川 菅原氏)

A：青年団の事務局長が南陽高校の同窓生で学校評議員をしている。南陽高校のカリキュラムに合う活動ができれば、青年団としても高校生としてもいいのではないかと考え、高校に入り込んで先生を巻き込みながら高校生募集の呼びかけをしている。この募集方法ができなかったら、南陽青年団が高校生とここまでの活動をするのは不可能だった。チラシを作って各高校に配りに行くなど、地道な活動も行っている。(南陽 小田氏)

### 【三川町教育委員会社会教育係 菅原氏、サークル代表高校生への質問】

Q：「来夢来人」というサークル名はどんな思いやイメージでできたものか。また、高校生の皆さんが幼稚園に通っていた時にも、すでに当時の高校生がボランティアに来てくれていたと思うが、その当時どんなことを感じていたのか教えていただきたい。(鶴岡市)

A：30年以上前のことなので、残っている資料から推察すると、夢が近づいてくるように一歩踏み出そうという意味が込められているようだ。(三川 菅原氏)

A：自分が幼稚園児だった時に高校生たちとの関わりはなかったが、小学生の時、駄菓子屋楽校や町のイベント会場に手伝いに来ているお兄さんお姉さんを見て、遊ぶ側ではなく手伝いをする側で自分も活動してみるの楽しそうだった。自分も同じ立場に立ったらどう思うのかと考え、来夢来人の活動に参加するようになった。(三川 発表補助高校生)



### 【南陽青年団 小田氏への質問】

Q：「南陽青年団」というネーミングはどんなイメージや思い入れによってできたものか。  
(鶴岡市)

A：青年団という言葉は、大人にはなじみがある言葉。年長者の方にもどんな活動をするかわかりやすいし、賛同を得やすい。青年団という名前があることで、昔、自分たちがやっていた活動と似ているとイメージ付けしやすい点がメリットと感じる。年長者は、「青年団はもっと遊べ」「楽しくまちと関わっていけ」といつてくれる。我々としても自分たちが楽しくやるということがモチベーションとなっている。青年団という言葉の持つ意味と自分たちの目的が合致しているため青年団という名前を使っている。

(南陽 小田氏)



## 【三川町教育委員会社会教育係 菅原氏、南陽青年団 小田氏 両氏への質問】

Q：「楽しい活動」といっているが、何をもって「楽しい」といっているか。(天野氏)

A：本当に楽しいは fan の楽しさではなく、interest「興味深い」の方だと思っている。自分自身も interest の方が好き。冗談を言い合う楽しさではなく、高校生もやりがいや達成感といった楽しさを知ったからこそ活動を続けてくれていると思う。その中から三川のために貢献したいという子が出てくれれば嬉しい。担当者がその楽しさをあからさまに出しすぎると子ども達が引くので、あまり見せずにやっている。(三川 菅原氏)

A：「楽しさ」は団員によって、また時期によって変わるものと感じている。最初はイベント等に来てくれた人と関わることや地域のために自分たちが何かをすることによって楽しさを求めていることが多かった。最近は高校生との関わりが増え、普段仕事や家庭で関わることのない高校生との関わりを楽しんでいると感じたり、下の世代の人を育てたり、一緒に育っていったりする楽しさを感じている団員も多い。(南陽 小田氏)

### Ⅲ 研究討議

(司会者) 2つの発表を成功事例、先進事例という光の当たった面だけで捉えるのではなく、次世代の人材育成に関わっていく中で、うまくいかなかったところ、悩んだところなどについて焦点を当てて研究討議を進めていきたい。

(小田氏) 青年団の組織として、活動に多く参加してくれるコアメンバーとそれとは別に実行委員会をイベントごとに作っている。イベントを企画する実行委員会、特に実行委員長は本当に大変。本当にしんどい。心が折れてしまわないか心配。

(菅原氏) 来夢来人の事務局は会員数が多いので、本当にしんどい。ボランティアは学校でも課外活動として評価されるため、写真を載せた通信を出してどんな活動をしているか学校に報告している。会員が多いため業務量は増えている。また、今年度は一番会員が多くなっているがここからは減っていく一方ではないかと不安になっている。コロナ禍はみんなが苦勞した期間と捉えられているが、来夢来人にとっては追い風だった。部活の大会や発表会がなくなったため、中高生が活動に参加してくれるようになり、ここ3年間は人が増えた。今年度は参加人数が落ち着いてきたと感じる。これからは人数を集めるというところから視点を変えていくことが必要か。人数が減ってきたのを目の当たりにした時、担当者のメンタルがもつかというのが不安。

(司会者) 成功事例の陰に、様々な思いやご苦勞が隠されていることがわかった。大変なことが多い中でも、なぜ活動を続けようと思ったのか。活動をやめずにこれほどまでの団体に育てたモチベーションは何か。また、団長や担当者の覚悟について伺いたい。



(小田氏) なぜやってこられたのかというと、この場に来てくれる仲間がいるから。同じポロシャツを着て、最前列で話を聞いてくれる仲間がいるから。自分たちがやる活動の先に何かあるというのはもちろんだが、一緒にいてくれる人がいることがとても大事で、それに勇気づけられた。団員の皆さんに感謝しながら活動を続けている。

(菅原氏) この場に来て発表してくれた来夢来人の高校生がいるからやってこられた。本当に頼もしいと感じている。若い人と関わることは楽しいし、パワーをもらえる。高校生の話を聞いていると楽しいし、やりとりしながら活動することが幸せな時間だと感じている。それがあから大変な事務作業もできる。楽しいの一言につきる。

(司会者) 活動に参加している高校生の思いもお聞きしたい。

(高校生) 今まででは指示されて活動をしてきたが、高校生になり、まとめる立場になったのが大変だと感じている。

(高校生) 山形よさや特色を維持したいという思いを持っており、来夢来人がそれを維持するための一つのきっかけとなってくれればいいと思っている。活動案も自分たちで出し、実現させることができたらいいと思って活動している。



(高校生) これまで知らなかった中学生でも、活動を通して話をしていくうちに仲良くなるなど、来夢来人の活動が地域の人や中学生と関わるきっかけとなっている。

来夢来人に入ったからこそ、活動を通じた話ができ、小さい町の中で知り合いがどんどん増えており、そこに楽しさを感じている。

(司会者) 発表者の思いを聞いて、感想や意見はないか。

(長井市) 意見なんて正直言えない。その考えをずっと続けてほしいと思いながら話を聞いていた。人が人を大好きになるのが人の本性だと思っている。ただ、人が人を育てるといふことの難しさは言葉に表せないほどのものだと思う。もう一つ考えなければならぬことは、まちに対して「好き」と表現している点である。今の子どもたちは直接まちを好きだと言ってくれる人は少ないが、今日、発表した高校生たちは三川町そのものを大好きだと言ってはばからない。三川町の素晴らしさという下地があるので、きっと素晴らしい高校生が育っているのだと思う。その点について私たちは大いに反省する必要がある。自分の住んでいるまちを誇りに思いながら、次世代の子ども達にどのように伝えてきたかということ顧みなければならない。話を聞いていると涙がこぼれそうになる。また、私たちの周りには人だけではなく、自然もいっぱいある。この自然にあるものをどう見ていくかということプラスしていくともものすごく力になり得ると思うし、今後の課題となるのではないか。皆さんは意識していないかもしれないが、周りにある素晴らしい環境を上手に活かしていると感じた。この活動を続けた先には間違いなく大きな成果が待っているはずである。

(司会者) 二人の思いに触れて、事業が続いていくための共通のヒントが見えてきた。天野先生より総括をお願いしたい。

## IV 助言

2名の発表者に共通することは、居場所を作ること。「来夢来人」という居場所は30年前にできたし、南陽青年団も「青年団」そのものが居場所となっている。加えて、大人が当事者になって居場所という環境を作ってきた。つまり、参加する側も企画する側も含めてみんな当事者性を持っているということ。また、自分たちの世代から次の世代に、あるいは仲間を増やしていくという縦と横の関係性を作っている点も共通している。

どちらも素晴らしい取り組みだったが、先進性や重要性ばかりを見てしまうと本当に大事なことが見えてこない。地域の何が課題だったのか、なぜ地域で居場所が必要だったのか、あるいはなぜ発表したお二人がそこに関わらなければならなかったのかという本質を見ないといけな。今日発表したお二人が本気になって取り組んだのは、事業や取り組みの向こうには必ず人がいたからである。社会教育が見なければならぬことはそこではないか。

人材育成というと「青年」が大きな柱になる。ロジャーハートの「参画のはしご」に自分たちの事業、活動を当てはめた時に、どの段階にあるのかということを考えてみる必要がある。事業内容もランディングする場所も決めてしまっている「操り参画」「お飾り参画」ではいけない。青年の教育で目指すランディングの場所は「子ども主導の活動」「子ども主導の活動に大人も巻き込む」段階のところである。南陽青年団の活動は、自らがこのような活動を組織している。その背景にあるもの、原動力となるものは、菅原さんが話した「fanではない interest の楽しさ」であり、小田さんの「事業を通じた人との関係性の継続」である。青年の教育をやっていこうとした時に、そこに「interest」の柱があるかどうか、そこに「人と人との関係性を継続する」何かがあるのかどうかという点で見ていくと、その事業が行きつく先も見えてくる。担当者の人材や予算について様々課題はあるが、一人で考えるのではなく、仲間と共に考えたい。横並びで一緒にため息をつける関係性が、我々社会教育関係職員にも必要である。



あなたのふるさととはどんなイメージかと問われれば、最初は山があって、川があってという返答になるが、突き詰めて考え

ていくと、本当のふるさととは単なる場所ではなく、その場所における人と人との関係性のことではないだろうか。ふるさとが大切なのは、世界に一人しかいないあなたが生まれ、世界に一人しかいないあなたが育ったところだからである。そのふるさとにおいて、先達から文化、伝統、歴史、そして命が受け継がれており、これからも同じように受け継がれていく。それは「命」と「思い」のリレーなのではないか。それをコーディネートしていくのが皆さんであり、私たちが日常的に取り組んでいる社会教育である。

No.	区別	市町村名	参加者 総数	大会 役員	実行 委員	事務局 員	受賞者	話題 提供者	助言者	司会者	伝統芸 能発表	一般 参加者	地区別 参加者数
1	村山地区市町	山形市	12	2								10	村山 114
2		上山市	17				1					16	
3		天童市	14	1			1					12	
4		山辺町	5									5	
5		中山町	4									4	
6		寒河江市	4									4	
7		河北町	5	1								4	
8		西川町	1									1	
9		朝日町	3									3	
10		大江町	11	1				1				9	
11		村山市	5	1								4	
12		東根市	20	1				1				18	
13		尾花沢市	9				1					8	
14		大石田町	4				1					3	
15	最上地区市町村	新庄市	7	1								6	最上 48
16		金山町	4									4	
17		最上町	12	1				1				10	
18		舟形町	4					1				3	
19		真室川町	3									3	
20		大蔵村	4									4	
21		鮭川村	8									8	
22		戸沢村	6									6	
23	置賜地区市町	米沢市	6	1								5	置賜 64
24		南陽市	9				2	1				6	
25		高島町	2									2	
26		川西町	3									3	
27		長井市	17				1					16	
28		小国町	6					1				5	
29		白鷹町	9									9	
30	飯豊町	12				1					11		
31	庄内地区市町	鶴岡市	82	2	3	12		1				64	庄内 145
32		庄内町	25	1	4	3						17	
33		三川町	9	1	3	3		1				1	
34		酒田市	16		2	9						5	
35		遊佐町	13	1	2	4	1					5	
36	教育事務所	村山	8			8						0	県関係 38
37		最上	3			3						0	
38		置賜	3			3						0	
39		庄内	9	1		8						0	
40	高等学校		3								3	県関係 72	
41	特別支援学校		1								1		
42	県生涯学習センター		3	1							2		
43	県社会教育施設		1								1		
44	県社会教育委員		1								1		
45	県社教連顧問		3	3							0		
46	県生涯教育・学習振興課		3			3					0		
47	その他(小学生・高校生・引率者、助言者、司会者)		34					3	4	1	26	0	
	合計		443	20	14	56	9	11	4	1	26	302	443

## 令和5年度 山形県社会教育連絡協議会表彰

## ★ 優良公民館等表彰 ★

長井市 中央コミュニティセンター

南陽市 沖郷公民館

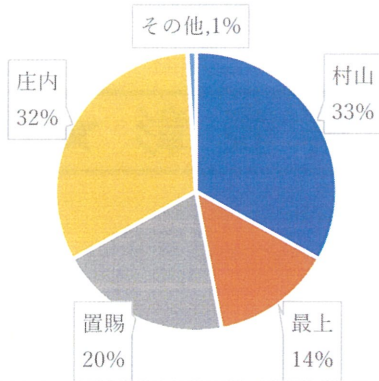
## ★ 社会教育関係職員・社会教育委員表彰 ★

- 松村 澄男（まつむら すみお）氏 前天童市立天童中部公民館長
- 中村 憲史（なかむら のりふみ）氏 上山市社会教育委員
- 工藤 光男（くどう みつお）氏 大石田町立歴史民俗資料館運営委員会委員
- 永登 一明（えいと かずあき）氏 尾花沢市スポーツ協会会長
- 沓澤 百合子（くつぎわ ゆりこ）氏 最上町社会教育委員
- 小林 繁治（こばやし しげはる）氏 南陽市金山公民館長
- 巻坂 恵美子（まきさか えみこ）氏 飯豊町西部地区公民館職員
- 大村 亨夫（おおむら みちお）氏 白鷹町社会教育委員
- 服部 正規（はっとり まさき）氏 遊佐町社会教育委員
- 川村 昭三（かわむら しょうぞう）氏 前庄内町社会教育委員

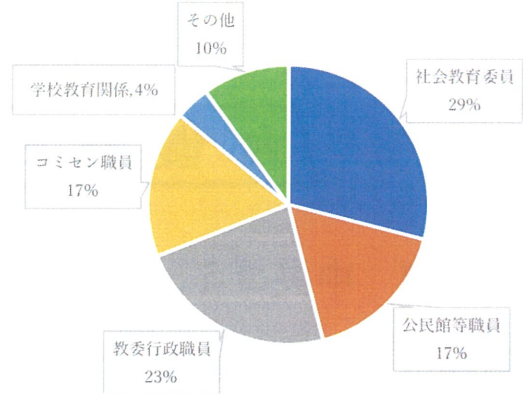
参加者アンケート結果

第14回山形県社会教育研究大会 参加者アンケート結果【回答数231】

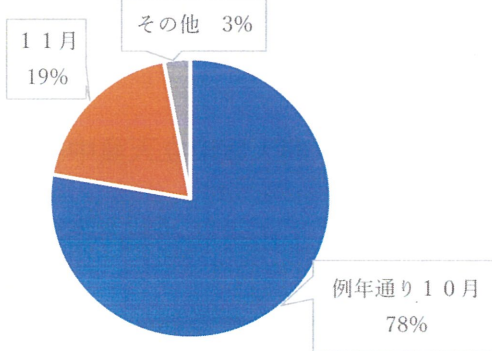
参加者（地区別）



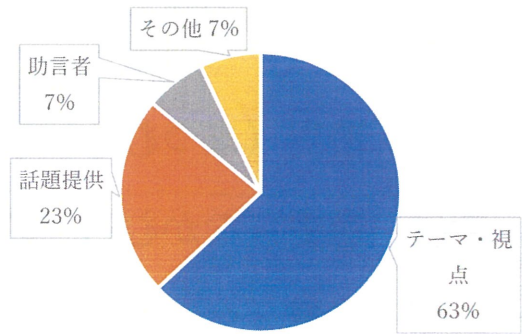
参加者（役職別）



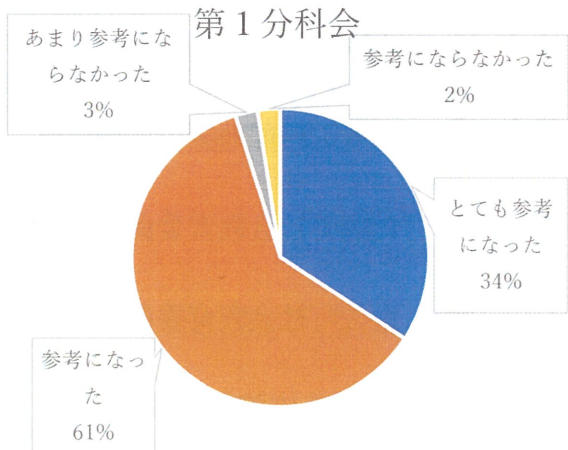
大会開催時期



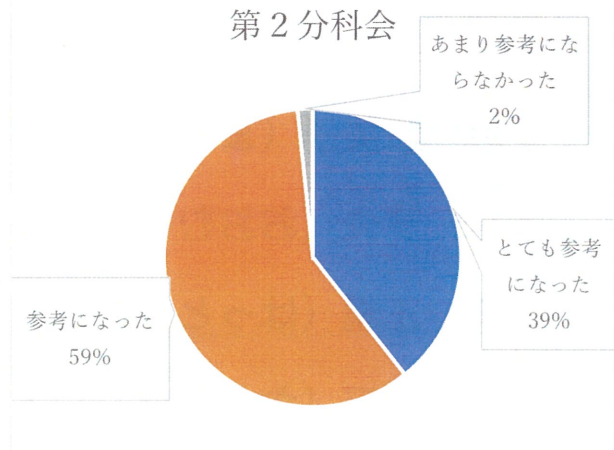
分科会を選んだ理由

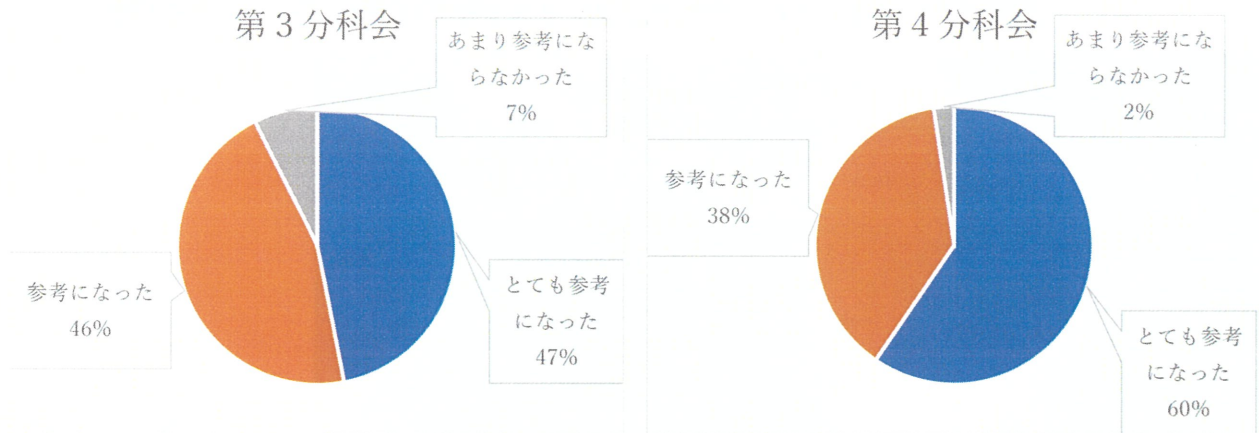


第1分科会



第2分科会

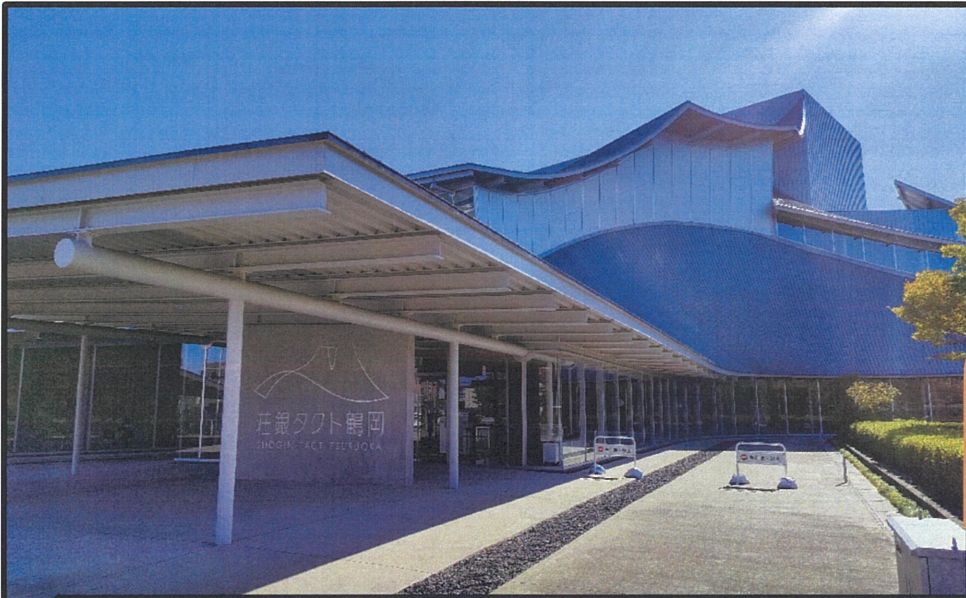




### 【参加者の声】

- 社教県大会は良い取り組みだと思う。今後とも末長く続けていってほしい。
- 私は教員だが、参加させていただき、社会教育とは何かということや社会教育に携わる方々の視点を学ぶことができ、学校教育に生かしたいと思った。教員の参加がもっと増えるといいと感じた。
- 分科会はとてもよかったし、教育長や社会教育担当職員とも一緒に参加したことで、次年度の動き方や今後の学校運営協議会の進め方など、その場ですぐに方向性を話すことができた。
- 助言者の意見は課題に対してとても参考になった。
- 助言者の先生の力強い言葉で社会教育委員としてこれからやるべきことが見えてきた気がした。
- 今後も様々な事例を紹介してほしい。
- 講演会が無かったのがよかった。
- スムーズな運営で大変聞きやすかった。
- 大会の骨格は、現状で十分有意義だと思う。
- 伝統芸能発表がよかった。こんな機会でなければ知り得ない。いい企画だ。
- △全部の分科会を聞きたかった。せっかく庄内まで来たので、午後からだけではもったいないと思った。午前中からやって欲しかった。
- △日程について、終了時間が11月中旬の16時では遅く、帰りが不安だった。午前開始の従来の日程の方が良いと思う。
- △分科会の形式でなく、全体会での講演を希望する。
- △話題提供者と助言者のディスカッションがあっても良かったかなと思った。
- △話題提供者にはご負担をかけることになり申し訳ないが、研究要約の資料では読み取れない部分(細かいところ、具体的などころ)がわかる補助資料が別に用意されているとありがたい。
- △分科会はあまりまとめることにこだわらないでフリートーキングの形式としてはどうか。まとめはその集約という形にしてはどうかと思う。
- △事例発表を受けて、実際にどのくらいの団体が実践に至って成果を出しているのかが知りたい。
- △高齢化社会が進み、公民館を利用し活動している団体も高齢化している。この状況の中で、これからの地域文化活動を推進していくために、公民館はどのような立ち位置で活動していけばいいのか。無理せずできる、できた、できそうな実践例を聴いてみたい。
- △社会教育施設職員や行政職員でない、地域の方の視点での取り組みを広く紹介していただけるとなおよい。
- △参加者が自由に意見交換できる時間があればいい。

# 第14回山形県社会教育研究大会会場



- ← ↓ 荘銀タクト鶴岡
- ・ 開会行事
  - ・ 第2分科会
  - ・ 第3分科会



- ↑ 鶴岡アートフォーラム
- ・ 第1分科会



- ↑ 鶴岡市役所
- ・ 第4分科会